

陪席実習生から見たスクールカウンセリングの基本

末内佳代

(キーワード：陪席実習，スクールカウンセリング，コンサルテーション，連携)

I はじめに

山下(1999)は鳴門教育大学生徒指導講座の歴史を3期に分け、第1期(1984~1991)は、開学以来、その学問的体系の確立をめざして、教育面とともにその研究の蓄積を心がけてきた時期である。第2期(1992~1994)は修士論文と学会誌の充実を図り、第1期を継承し発展させた時期である。そして、第3期(1995~1999)は生徒指導講座という共通の場において蓄積してきた学際的な生徒指導の知と、臨床心理学および教育学の専門の知との相互交流により生徒指導の実践的な知の枠組みを提示するように求められている時期である>と述べている。加えて第3期は1995年から文部省(現在の文部科学省)による「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」が開始され、本講座の教員が学校現場に出かけるようになり、徳島県教育委員会との連携がさらに深まった時期でもあった。

この1997年に筆者を含めた鳴門教育大学生徒指導講座の修了生3名が、カウンセリングの基礎・基本を身につけるために再度長期研修生として1年間本講座に徳島県教育委員会より派遣された。カウンセリング研修における特筆すべきものとして、スクールカウンセリングの陪席があげられる。学校臨床心理実習ともいべきこの実習は、本講座の教員のスクールカウンセリング場面に陪席することによって、カウンセリングの実際を学ぶというものであった。

1年間を通して行われた陪席実習によって学んだ体験、すなわち、スクールカウンセラーが、どのようにカウンセリングを進め、どのようにコンサルテーションを行い、学校の職員とのかかわりにおいて何に留意したかを目の当たりにした。そこで習得したものは、筆者のカウンセリングの礎となり現在に至るまで筆者の実践の場で生かされている。

II 目的と方法

筆者は2005年より心身健康研究教育センターに配属され、相談員として働く傍ら、鳴門教育大学大学院学校教育研究科教育臨床コースにおいて授業を担当している。そこでは、先にも述べた、当時の実習体験によって習得したものを話すことが臨床心理士を目指す、特に学校現場で働くことを目標とする大学院生にとって少しは参考になると実感している。それは筆者の教育、福祉領域における様々な現場での出会いや相互作用を通して得たカウンセリングにおける変化していくものを支えてきたカウンセリングの原則であると考えられる。今一度1年間の陪席実習全体をスクールカウンセリングのモデル事例として捉えなおし、話すだけでなく、書くことによってスクールカウンセリングの基礎・基本を明らかにしたいと思う。そして、本報告が臨床心理士を育てる大学院教育に少しでも役立てることができればと願っている。

山下(2000)はスクールカウンセラーが専門家と言われる3つの条件を「まず第1番目は、カウンセリングができる。第2番目は、子どもの状態や心理的背景を、保護者や教師に説明ができる。第3番目は、さまざまな人間関係における中間者・調整役として、潤滑油や橋渡しの役割を担うことができるということである。そしてこの三つは相互に密接に関連しあっている」と述べている。よって、このカウンセリング、コンサルテーション、連携の観点から事例を考察する。

III 事例

1. 陪席実習の概要

陪席実習担当教員でもあるスクールカウンセラー(以下、SCと略す)は現在の鳴門教育大学大学院学校教育研究

科教育臨床コースの山下一夫教授である。陪席実習は週に1回5月から翌年の3月までの約1年間にわたって（実施日数34日）実施された。陪席した面接は133回である。その内訳は母親面接98回、母子同時面接28回、父子同時面接3回、両親面接2回、父親面接1回、担任と母親の同時面接1回である。主訴はあらゆるタイプの不登校であった。面接時間は原則50分であり、親面接が多いこともあり隔週ごとのカウンセリングがほとんどであった。母親面接において、SCは子どもの心の状態が不安定なとき、大きな変化が見られたときには毎週にすることを付け加えていた。

実習はSCが中学校に出かけるところから始まっていた。社会人としての常識である服装、態度、時間の厳守等に関して範を示した。とりわけ時間の厳守に関しては心に残るものがある。SCはカウンセリング開始の1時間前には学校に出向き、学校の職員と給食を共にし、時間に余裕のあるときは、学校の校舎内外を散策した。そこで学校職員の指導や子どもたちの生活を見守った。このことに関しては「4. 連携」でも述べる。

中学校のSC担当は生徒指導主事である。1時間ごとに区切られたカウンセリングの予定表を両者が保管しており、ほんの数分という短い時間でも能率よく打ち合わせをしていた。SCは空いている時間帯ならば急な面接が入っても快諾し、精力的にカウンセリングを進めていった。

相談室は各学年の教室から少し離れたところにあって、応接セット（机・椅子）、冷暖房、SC用の湯茶などの設備が整えられていた。1階にあったので舎外からの視線を避けるためにカーテンが引かれていた。

初回面接の際、SCは筆者を含めた2名の実習生が現場の教員であることを紹介し、陪席許可を求めた。部屋は広く、1名は衝立の向こうで、もう1名はクライアント（以下、CIと略す）とSCから席を離して陪席した。衝立側の陪席者が記録を行った。

2. カウンセリング

1) 緊張とゆとり

SCは初回面接の際も、継続面接の冒頭にも、時候の挨拶やありきたりの社交辞令はなかった。「何からでもお話ください」「どうですか」といった具合で面接にすぐに入っていく。それは心地よい緊張感と集中力を保持したまま、CIを50分間の非日常に誘った。

しかし、そこでの対話は自由でCIはありのままを方言で語っていった。それを支えるものとしてSCのゆとりがあった。一例を挙げるならば、傾聴の代表とも言うべき「あいづち」において同じ「うん」というあいづちでも、その声のトーン、イントネーション等によって相手の心に沿い、相手を理解する「あいづち」になることを学んだ。SCがゆとりをもつことができれば、つまり山下（1994）の述べる「自分自身の体や心のなかで、クライアントと2人であることによって触発されて起こった何らかの動きを、力をぬいて味わえる」ことができるならば、「あいづち」にもあらゆる可能性が生まれてくることを実感した。

SCの面接には流れる感覚があった。語りには流れと広がりがある。それが紆余曲折を経て最後の面接を迎えることとなる。中学3年生の場合、中学校卒業ということで自ずと最後の面接日は約束されていた。SCは一山越えたところであっさり最後の約束の日を迎えた。そこには「さようなら」も「お元気で」の言葉もなかった。ただ、不安を訴えるCIにはSCが来年度もここにいることを告げた。

2) 初回面接と見立て

スクールカウンセリングには、当然のことだが他の初回面接者は存在しない。よってSCがその役割を担うのだが、その意味を来談意欲に置いたという印象が強い。つまり、山下（1994）の述べる「面接をしていきましょうと言う暗黙の合意（コンタクト）を結ぶことからはじめようという姿勢」で初回面接に臨んだと思われる。筆者が陪席実習をしている間、CIからの面接のキャンセルがほとんどなかったことがその証であると考えられる。

SCはCIの語りを尊重し、CIの語りにおいて気になる症状や不適応行動が出てきたときにその言葉を繰り返す、つぶやくことによって、またその言葉に少し重ねることによって語りを広げていくイメージがあった。

母親面接の場合、主訴のほとんどが不登校であったのでCIは、まず現状を詳しく語った。SCは受容と傾聴に努めた。時間軸に沿って、唐突に子どもの出生前後の状況から尋ねることはなかった。現在から遡るように聞いていくこともあった。聞いていくうちに、言いよんだところは、「その場では聞かなくていい。話されたかったらまた後で話される」と踏み込みはしなかった。初回面接の際に全て聞くというのではなく、2、3回に分けて初回面接をより深めていく感があった。

母親面接における初回面接において、子どもの様子を聞く際、SCが必ず尋ねる事柄があった。「お風呂はどうですか。いつごろまで一緒にお入りになったのでしょうか。誰と入られていましたか」「一緒に寝たのはいつまででした

か。誰と寝ていましたか」「お子さんは何をするのが好きですか」「お小遣いはどうされていますか」。この①風呂②寝る③好きなもの（漫画・テレビ番組・音楽など）④お小遣いはどのCIに対してもできる質問であり、子どもと保護者をつなぐものであり、自立と依存の見立てともなりうる問いかけである。この話になるとCIからはそれにまつわる子どものエピソードや家族関係のありようが語られることが多いため、話の流れが動き出すことがあった。

見立てに関して山下（2000）は「スクールカウンセラーは、不登校児に対するカウンセリングだけでなく、親や教師集団にその見立てを述べて共通理解を求め、不登校児への取り組みを組織的にしなければならない」と述べている。実際、SCは担任や生徒指導主事、学年主任などに相談室に来てもらい、不登校の過程がどのように進んでいるかの見通しを説明し、協力を求めた。ただ、保護者に関しては、見立てを述べるというよりは面接場面において、現在、そして卒業、進学に向けての近い将来に関してCIの腑に落ちる言葉で語った。つまり上から話すのではなく、CIの話に耳を傾け、心で注意深く観察し、学校臨床の知によって客観的事実に基づいた話をすると言った具合である。この作業が繰り返されているとき、SCやCIから「でも」「しかし」という言葉は生まれてこなかった。このときの傾聴と観察は、次の「3）厳しい楽観主義者」に通じる姿勢であり、腑に落ちる言葉は「3. コンサルテーション」にも通じるのでそれぞれの項でも述べたいと思う。

3）厳しい楽観主義者

SCの面接は常に希望があった。「厳しい楽観主義者」というのは、山下（1994）がサルトル（Sartre, J.-P. 1946）の言葉をもとにして次のような意味を持たせて用いたものである。＜我々カウンセラーは時の女神や人間の可能性を信じるがゆえに、楽観主義者である。しかし同時に、現実の厳しさを、そして何より自己実現が苦難の道であることを認識しており、厳しい楽観主義者である＞。

「厳しい楽観主義者」は、山下（1999）の述べる＜地面の下で種が根や芽を出していることを感じる＞ことができる。つまり、人間の可能性に光を当てることができる。保護者も子どもの心に添うことができるようになるとそれができるようになり、SCに語るようになる。カウンセリング場面においてSCはその可能性を語りのなかから必ずすくい上げた。一例を挙げてみる。

① SC 物理学者になりたいと。そのため高校、大学進学のことを考えるようになったこと。そして、そのことをご両親が確認できるようになったこと。そして、そのことをご両親が確認できたこと。これは大進歩ですね。

CI すぐに期待してしまうんですが、もし裏切られたら……。もし、本人が高校に行けなかったら……。

SC 親としては期待して当然。高校にいけるかどうかはお母さんが聞き直って、今は少し置いておきましょう。前は、お子さんは高校進学を避けていた。逃げていた傾向がありましたね。ですから、そのことについて真剣に親子で話し合わなければと思っていたんですが、その点、本人から言ってくれたことは非常に良かったですね。

② CI <母親は父親と相談して新しいパソコンを購入し、バイトでお金儲けをしたいという子どもの金銭感覚の安直さを語る。>

SC 嫌いなことをするのは大変。自分の好きなことで、かつ資格めいたことや専門めいたことを勉強できれば金儲けに繋がるといいですね。親とのつながり、友達とのつながりがあって、しかもパソコンで外部とのコミュニケーションが取れていることはすごいですね。

③ CI（父親）<（父と娘が同席）父親は自分の仕事がいかにストレスフルであるかを語り>だから、そのストレスのはけ口がないからどうしても……。そういうところのしわ寄せをこの子が背負っていると思う。

SC いろいろ遊んであげたり、怒られ役をしてあげたりしていたんだね。

CI（娘）かな……。

CI（父親）そうだよ。

SCはこれまでのカウンセリングでCIが語った言葉を用いることに努めたというイメージがある。

SCは語りの内容そのままを、他のカウンセリング場面に使ったことはない。出会ったCIは一人として同じ人はいないのだから当然のことである。ただ、厳しい楽観主義者のもつ冷静な観察眼と温かい心その場に流れる雰囲気つ

まり共感的支持というものはどのカウンセリング場面にも存在した。

3. コンサルテーション

山下 (2000) は「<スクールカウンセラーはスーパーヴァイザー・コンサルタントとして指導助言をする役割を担うこともあるが、中間者・コーディネーターとしてさまざまな人の意見を聞き、様々な方向に引き裂かれようとしながらも、各人の意見を織り成し、問題を共有していくという役割こそ大切ではないかと思われる>と述べ、コンサルテーションに含まれる SC と教員の上下関係を自覚し、その言葉を使うことを認めていない。しかし、SC は、不登校の時期や場に応じて具体的なコンサルテーションを行った。教員集団に対するそれは、山下 (1999) の「不登校の経過」に基づくものであったが、保護者や子どもたちへのコンサルテーションは SC のよく用いる「子どもの心と大人の知恵」を使って具体的対応を助言するという感があった。そして必ずその後子どもなら「と思うけどどうやろ」と付け加え、教員や保護者なら「と思うのですが」という言葉を続けた。

コンサルテーションの具体例として山下 (1999) の「依存と自立サイクル」の理論によってまとめたものを表 1 に示す。

表 1 SC のコンサルテーション

	子 ども	保 護 者
安心感 (依存)	<ul style="list-style-type: none"> *受験直前のこの時期はいろいろな人にどんどん助けをもらうことが大切 *床に就いて眠れなくても横になっているだけで身体は休まる、2日に1回は十分な睡眠をとるようにしたら身体と脳は休まる、早く眠るためにも早く風呂に入る日を作るようにする、テレビ番組などは録画しておくのも良い 	<ul style="list-style-type: none"> *学校に関することはしばらく置いて今意欲のあることを大事に育てる *家庭に問題があったと決め付けられない、原因は何か分からない、いろいろなものが重なり合っているのであろう、後悔しても仕方ないことを振り返ってもどうしようもない、さばさばしている態度のほうが子どもの心の安定につながる *最低限同じものを食べて同じ時間を過ごす、焦らない、一日一回ほめる、何かをほめようと思って見ていると子どものことをよく見るようになる、それが重要である *ただ黙って見ている、ただその時、放りっぱなしではない、一言声をかける
自発性 (自立)	<ul style="list-style-type: none"> *学習の基本はいかに切り捨てるか、不得意なものは捨て、得意なものに重点を置く、失敗は恐れない、1日30分する、週に2回は休む *受験日が近づいてきても、もう駄目ではなくて、まだ大丈夫という発想を持つ *入学試験に合格した後のことは合格してから考える *好きなものを見つけるのは大変なこと 	<ul style="list-style-type: none"> *親として大事なのは子どもが自分で決めてこうしたいということを援助すること *自分から塾に行くようになったことは心のバロメーターであり、その点をよしと考えて、少々ことは黙認する *長期休暇の前にチャンスがあれば、保護者から「どうするの」と声をかけるのも一つの方法である、ただ待つのではなくどこかで機会を見つける、駄目な場合はすぐさま中止して次の機会を焦らずに待つ *子どもが「料理を作る」のは大切なこと、材料のリクエストはないか尋ねたり、食べさせてもらったり、おいしいものを買ってきたりして会話をふやす
社会性 (自立)	<ul style="list-style-type: none"> *友達と無理に付き合うことはない、無理することはしない、気が合う人がいなかったら寂しいことは寂しいが、面と向かって付き合うのは疲れるから漫画読むとか、クラブとか一緒にやりながら関わる、その一方で自分の好きなことを見つけながら、そのうちに自分に合った人が必ず見つかる *適当に聞き流すことも大切 *高校へ進学したら何回休んだかは記録しておいたほうが良い、何回休めるかも調べておく、一つでも単位を落とすと進級できないから 	<ul style="list-style-type: none"> *専門の資格を取るとはたいせつなこと、そしてその専門の資格を取るためには、まず高校に入学を、その後専門の道を進んでいったらいい *社会性が養われるときは、加速度的に伸びていくが今はまだ時期ではない、少し外に出られるようになったら次の行動に出るから今は焦らない *人目に慣れるためにも外食や外での遊びに誘ってみる、家族に守られて慣れていく慣れの練習が必要 *勉強のことよりも、まず人間関係が重要である、勉強は必ず追いつく *駄目なものは駄目、お小遣いは渡すがそれ以外は駄目とけじめをつける、給与明細書を見せるのも一つの方法

4. 連携

スクールカウンセリングにおいて、教師との連携の基本とは、山下（2005a）によると「教育の専門家である教師とカウンセリングの専門家であるスクールカウンセラーが互いに専門家として認め合い、双方の仕事を尊重することから始まる」とある。SCが実際の教育現場でどのような連携を行ったかを述べる。

1) スクールカウンセリング初日

まず管理職との話し合いの機会をもった。管理職の教育方針を傾聴し、生徒や校区の実態、生徒指導の体制、校務分掌を把握した。それと並行して職員写真を見て名前と顔を覚えた。それによって、①学校のニーズを理解する。②SCが「うちの学校」という意識（実際SCは会話の中で自然にこの言葉を使用した）を持つ。③挨拶や会話において、単に「先生」と言うのではなく「〇〇先生」と個人名から始める。これらの重要性を実習生に示唆した。

2) 給食

SCは毎週給食を職員室で食べることにしていた。配膳も片付けも自分自身で行った。管理職、生徒指導主事、特殊学級担任、養護教諭などの職員とともに給食を食べた。山下（2005a）は「実際、教師もスクールカウンセラーも忙しいので、給食を一緒に食べながら話し合う機会を持つ学校もある」と述べている。SCはよく「先生方は忙しいので、余分なことをしてもらったり、特別な時間を設けたりしなくてもできる方法を考えることが大切」と言っていたことが心に残っている。

3) 学校めぐり

学校めぐりとは、スクールカウンセリング初日に行った学校の施設見学も含め、先の「1. 陪席実習の概要」にも述べた、カウンセリングの合間に行った校舎内外の散策をいう。山下（1999）は生徒指導における基本的態度のふさわしい対応として「バイクに乗って来校した卒業生に対して、普段は厳しいことで知られている生徒指導主事が、穏やかに近づき、顔見知りかどうか確かめて、腰をおろして肩を並べ、雑談し、彼らの話を聞き、そして彼らを帰らせた」を挙げているが、これはこの散策での印象をもとにしている。

4) カウンセリング

SCはカウンセリングの流れのなかで、自然に人と人をつなぐ役目をした。心と心に橋を渡す役目をしていった。保護者には「分からなかったらお子さんに聞いてみたらいかがでしょうか」という問いかけをよくした。同じ内容を教師にも伝えた。保護者や教師と子どもをつなぐきっかけを作っていた。また、山下（2005b）は「親子同席で面接をするとき子どもに対しては、親にしてほしい要望を聞き、親に対しては子どもができそうなことで何かしてもらいたいことを尋ねる」と述べている。SCはこの問いかけによって保護者と子どもをつないだ。

また守秘に関しても、山下（2005a）は「スクールカウンセラーと子どもは何をどのように学級担任や保護者たちに伝えればよいのかについて、毎回面接の終わりごろに話し合うのがよい。このことによって、子ども自身が人間関係について考えを深めたり、教師や保護者たちに事態改善に向けて働きかけたりすることがある。なお、相談者が保護者の場合も同じことである」と述べている。SCは、子どもには「作戦を立てようか」とか保護者には「だめもとで」という言葉で、人と関わることに臆しているそれぞれの背中を少し押していた。

5) 連携機関

SCは広範囲にわたるネットワークを持っていた。医療・福祉・教育・司法あらゆるところに顔見知りが出て、その機能を確実に理解していた。「必要ならば私の名前を出してください」とCIに声をかけた。依頼すると、引き受けてくれるだけの人間関係を普段から大切にしていた。

IV 考察

1. 陪席実習から学んだもの

事例からも分かるように、SCは「CIに対する態度」を陪席した実習生見せたという印象がある。「やって見せる」というよりは「自然に在りのままを見せていた」と言ったほうが適切かもしれない。学習の目標・内容・方法を前もって明らかにした実習とは異なっていた。それは、SCが大学院生として学ぶ現職の教員の指導者であることから、実習生の特性をよく理解していたからだと考える。

例えば、現職の教員なら自転車置き場に行けば一目でその学校の実態が分かるといったところである。つまり自転車の整理整頓の状態、そこで交わされる生徒の会話の内容、職員の対応、笑い声のトーン、雰囲気、タバコや菓子の匂いなどによって現職の教員が学校の一面を理解する力があることを SC は知っていた。SC は実習生の観察眼を信じ、スクールカウンセリングの陪席実習によって、CI に対する姿勢や態度を学ばせたのである。またその一方で、SC が「ものは言いよう」と言えば、それぞれの CI の語りに添った開かれた話し方や伝え方をと考えるのに対して、現職の教員の中には「ものは言いよう」と言えば、外から来る者に対して、閉ざされた防衛的な話し方や伝え方をと考える者がいることも十分理解していた。そこで「手の内を見せる」語り、つまり自由さとゆとりを持ち物事に動じないスクールカウンセリングを直接見聞きさせることによって実習生にカウンセリングの本質を理解させようとしたのではないだろうか。

このような陪席実習の体験によって学んだものを一言で言うと「開くスクールカウンセリング（温かい雰囲気・受容・共感）と閉じるスクールカウンセリング（枠・制限・機能）」である。ただ、陪席をして感じたことは「開く」は「拓く」に通じ「閉じる」は「綴じる」に通じるということである。つまり、SC のスクールカウンセリングには、包み込む母性的な面の中に可能性を拓くという父性的な側面があり、契約関係という父性的な面の中に一つのものにおさめて綴じるという母性的な側面があると考えられる。河合（1995）は教育界においては「ややもすると、父性原理に基づく考えや制度と、母性原理に基づくそのどちらかが正しいかという論争になりがちだが、そうではなく、両者を共存させていく具体策を考えることが大事なことが多い」と述べている。これらを踏まえて SC の行ったカウンセリング、コンサルテーション、連携を考察する。そして、その要約を表2に示した。

表2 陪席実習から学んだもの

	開く（温かい雰囲気・受容・共感）	閉じる（枠・制限・機能）
カ ウ ン セ リ ン グ	<ul style="list-style-type: none"> * 語りを媒介として人間の可能性を信じ、語りの中から可能性をすくい上げるカウンセリング * 自由さとゆとりを持ち物事に動じないカウンセリング（手の内を見せる語り） * 言いよどんだところには踏み込まないカウンセリング * ゆとりを持ち、心や体の力を抜いて、相手を理解するあいつち * CI の言葉を繰り返してつぶやき、またその言葉を重ねることによって広がる語り 	<ul style="list-style-type: none"> * 面接時間の厳守、時候の挨拶やありきたりの社交辞令のない面接の入り方と終結時の淡々とした態度に示される CI に巻き込まれない強さ * 解釈のもつ危うさと不遜さへの理解
コ ン サ ル テ ー シ ョ ン	<ul style="list-style-type: none"> * 人間としてカウンセラーとして、実際にあるいは間接的に体験した人の心に通じる言葉 * 言葉の終わりに曖昧さを残すことで、追い詰めずに、育てる自主性 * 上からの一方的な指導ではなく、言葉のやり取りを大切にしたり、CI との相互作用の中で語られる助言 	<ul style="list-style-type: none"> * コンサルテーションは特効薬ではない、連発はしない、きっかけにはなるが本質は簡単に変わらないことの理解 * 冷静な観察眼をもって客観的事実による不登校の見立て * 具体的な生活場面を思い描ける言葉を使い CI の実生活に密着した分かりやすい指導
連 携	<ul style="list-style-type: none"> * 学校組織の一員として学校文化（相談室外の日常生活）を知ろうとする努力 * 学校に関わる様々な人々（教員・子ども・保護者・連携機関の職員）から学ぶ姿勢をもつことにより深められる SC の在り方 	<ul style="list-style-type: none"> * 顔を覚え個人の名前を呼び、個性や特性、役割を理解し尊重する態度 * 守秘において場に流されない専門家としての強さと厳しさ

2. カウンセリング

1) 開くカウンセリング

SC のカウンセリングの基礎となるものは山下の述べる（1994）「人間として、その個人の存在を尊重するという姿勢が根底になければ、人の心を理解しようとするとは、その人の心の中に土足で入りこむようなものである」と考える。これは河合（1992）の「治療者とクライアントの水平関係」に通じるものである。この水平関係において、河合（1992）は「クライアントの自主性、および、クライアントの無意識の自律性に対して心を開いてゆかねばならない。それらのぶつかりのなかから治療の過程が展開してゆくのであり、それはまさに『物語』を創り出すことになる」と述べている。

また、山下（1990）はアパシー青年の事例において、＜クライアントとカウンセラーがことばとことばの背後にあるイメージや感情のやりとりの流れを楽しむ連歌的側面のある＞話し方・自己を表現するナラティブの問題を「カウ

ンセリングそのものにとってとても重要な問題であると考えられる。語り手と聞き手、私とあなた、クライアントとカウンセラー、さらには親子、友人、男と女、筆者と読者というように、人と人とのコミュニケーションにおいて、これは根本的な問題なのだと思います」と述べている。

さらに山下（1999）は「目の前の子ども（その人）と自分自身、そして二人の関係、さらに二人をとりまく人々や環境、あるいは時の流れも考慮し、自らが自らの答えを求めるという行為を抜きにして生徒指導や教育相談は考えられない」と述べている。そこには心を開くことによって、視座を心理臨床から学校臨床に移してもなお符合する、語りを媒介として人間の可能性を信じたSCがいた。この姿勢はSCのスクールカウンセリング全体に流れているものであった。

2) 閉じるカウンセリング

河合（1970）はカウンセリングとは「深いけれど親しくない関係、親しくないが、それゆえにこそ深い関係に入り込めるという事実をよく知るべき」であると述べ「カウンセリングという仕事はさびしい仕事」（1975）と述べる。SCは陪席した実習生に面接の入り方や面接時間の厳守、終結時の淡々とした態度などで本質には関わらない安易なCIの感情の揺れに巻き込まれない強さを教えた。また、初心者にありがちな浅薄な知識を用いた短絡的な解釈のもつ危うさと不遜な態度を無言のうちに戒めた。

3. コンサルテーション

1) 開くコンサルテーション

筆者はこのコンサルテーションがSCの持ち味ともいうべきものだと考えている。表1にもあるように、子どもに対しては「その言葉が聞きたかった」とおそらく子どもが思うであろう生きて働く知恵がふんだんに盛り込まれている。山下（1999）は「教えなければいけない、正しく導かなければいけないという意識が勝ちすぎて、交流の窓を閉めてしまわないように注意する必要がある」と現職の教員に対して注意を促しているが、これらの言葉は交流という名目だけの機嫌を取る見え透いた言葉ではなく、SCが、人間としてカウンセラーとして実際にあるいは間接的に体験して得たものであり、それゆえに人の心に通じる言葉であると考えられる。そして、SCが言葉の終わりに「と思うけどどうやら」とか「と思いますが（いかがでしょうか）」と付け加えることによってすこし曖昧さを残すことで、SCがよく用いる「ねばならぬ」という追い詰めた気持ちにさせない、それでいて「やってみようか」という自主性を育てる開かれたコンサルテーションにしていたのではないだろうか。SCはコンサルテーションを行ったがその内容は上からの一方的な指導ではなく、言葉のやりとりを大切に、CIとの相互作用の中で語られる助言であった。

2) 閉じるコンサルテーション

SCは時期を捉えて、コンサルテーションをしていったが、それは特効薬ではないこと、連発しないこと、きっかけにはなるが本質は簡単には変わらないことを熟知していたと考える。よって、CI自身が自分で不登校を引き受けるために、理論でなくできるだけ実生活に密着した分かりやすい指導を行った。一例を挙げるなら、「山あらしジレンマ」を知っている子どもには再度SCの言葉で分かりやすく伝えることによって共通理解をした後にその言葉を用いたが、知らない子どもには表1の社会性（自立）の例にあるように、具体的な生活場面を思い描ける言葉を使い、その子どもの不登校の背景にあるものに応じて分かりやすく説いていった。教員に対するコンサルテーションも先にも述べたとおり、具体的例を使った分かりやすいものだった。それは河合（1995）のいう「個人の責任・個人の確立・個人の成長を大切にする父性原理」の指導が働いているものだと考える。

4. 連携

1) 開く連携

山下（1999）は教育相談担当教師に関して「教師が学校でカウンセリングを行うとき、カウンセラーであるとともに、教師であり学校組織の一員であることを忘れてはならないし、そのことを生かさなければならない」と述べている。そして、SCは自由さとゆとりと物事に動じない態度で自らも学校組織の一員として開かれた連携を行った。それが、SCが「うちの学校」という言葉を会話の中で用いた所以であると考えられる。それはコミュニケーションの上だけの表面的なものではなかった。SCは学校文化の本質をよく知っているがゆえに学校組織の一員となることに抵抗はなかったのではないだろうか。山下（2005b）が述べるところの「連携の下地」において、相談室から一步出た子どもたちやそれを取りまく人々の日常生活を知る努力が不可欠と考える。その地道な努力が実を結び「うちの学

校」は自ずと口をついて出てくるのではないだろうか。「うち」の概念からいえば一見矛盾した考えとみなされるかもしれないが、「そと」から来たものが「うち」に入るためには開かれた心が必要なのである。

給食を食べることにしても、限られた時間での連携の効率化を図るだけでなく、職員室で給食を食べる養護教諭、特別支援学級担任、生徒指導主事、教頭、校長など様々な立場の職員から何かを学ぼうとする姿勢をもつことにより、さらにSCの在り方を深めていく機会としていたと考える。そして、その姿勢は給食だけでなく校舎内外の散策、カウンセリングさらには学校に関わる連携機関までにも広がっていた。SCが関わるところではCI（子どもと保護者）と教員そして各機関の職員が自然に連携していった。

2) 閉じる連携

一方でSCは「うちの学校」のもつ閉ざされた部分も理解していた。「うちの学校」「うちの先生」という保守的な考え方をもつ文化の中においても顔を覚え個人の名前を呼び、その人の個性や特性（個人差）、役割を理解し、尊重することの大切さを陪席実習生に態度で教えた。守秘においても、CIとの話し合いで話してもよいことを明確にし、約束を守ることの大切さを実際に示した。SCはいかなる場合にもCIとの約束を破ることがなかった。それは学校という場に流されない専門家としての強さであり、厳しさであった。

V おわりに

カウンセリングに行き詰ったとき、最初から記録を読み返してみると新たな気づきが生まれるが、今改めて陪席実習をふりかえることで、一回一回のカウンセリングを大切にすること、新鮮な気持ちでCIに向うことの重要性を強く感じる。

現在、筆者は本学の心理・教育相談室の初回面接者として働いている。初回面接者は、カウンセリング、コンサルテーション、連携の全てを踏まえて臨むことが大切であると考え。その意味においても自分を見つめなおすよい機会となった。そして、筆者の初回面接に陪席する大学院生に、学んだことを伝えることができたらと心から思う。

文献

- 河合隼雄（1975）：カウンセリングと人間性。 創元社。
 河合隼雄（1992）：心理療法序説。 岩波書店。
 河合隼雄（1995）：臨床教育学入門 子どもと教育。 岩波書店。
 Sartre, J.-P.(1946/1948) : *Existentialism and Humanism*. Methuen.(伊吹武彦(訳)
 (1995) : 実存主義とは何か—実存主義とはヒューマニズムである。 人文書院)
 山下一夫（1990）：アパシー青年のカウンセリング。 河合隼雄編。事例に学ぶ心理療法。 日本評論社。 pp.209-251。
 山下一夫（1994）：カウンセリングの知と心。 日本評論社。
 山下一夫（1999）：生徒指導の知と心。 日本評論社。
 山下一夫（2000）：スクールカウンセラーの不登校児への取り組み。 村山正治編。臨床心理士によるスクールカウンセラー—実際と展望。 至文堂。 pp.170-175。
 山下一夫（2005a）：学級担任との連携。 滝口俊子・倉光修編。スクールカウンセリング。 放送大学教育振興会。 pp.116-125。
 山下一夫（2005b）：依存と自立のサイクルをもとにした生徒理解。 新訂学校臨床心理学。 滝口俊子編著。 放送大学教育振興会。 pp.85-98。

The Basis of School Counseling from the View Point of the trainee of Clinical Psychology

Kayo SUEUCHI*

(Keywords : training on the scene , school counseling, consultation, coordination)

The purpose of this paper was to clarify the basis of school counseling by the training in the junior high school during the year from the view point of the trainee. The counseling, the consultation, and the coordination were used in the discussion of the basis of school counseling. As a result, it was noted that the open (the atmosphere of warm, acceptance, and empathy) and the closed (frame, restriction, and function) school counseling were used by the school counselor. This showed that the maintaining of the fuzzy stance by the school counselor was important.

*Research, Education and Management Center for Mental and Physical Health, Naruto University of Education